

クアラルンプール日本人学校児童・生徒の 国際性に関する調査研究

Research on the Internationality of Students of the Japanese School of Kuala Lumpur

田 浦 加津子 (Taura, Kazuko)

In the coming globalized 21st century, in order for Japan to naturally take on a vital role in the symbiosis of mankind and its many nations, internationalization will be of critical importance. On an individual and personal level, internationalization will require a capacity for internationality, which can be defined as a competence and attitude for internationalization. In seeking to acquire concrete data concerning the problems and issues of internationality, research was carried out at the Japanese School of Kuala Lumpur in Malaysia, with an emphasis on the daily realities of life for the children studying there.

序 章

日本が21世紀の世界で重要な役割を果たすためには、国際化することが緊要な課題の一つである。特にアジアの地域で、日本が過去に犯した行動を反省し、信頼をかちうるためにも、国際化していくことが大切である。

そのためには、わが国民の考え方にひそむ集団志向性、島国根性、経済至上主義を克服し、真の国際性と世界平和実現の不滅の夢をもつことが必要である。

国際化が要求する資質を国際性と私は名づけてきた。それは自国文化の長所を理解し、他国の文化にも建設的に接し、両者すなわち自国の文化と他国の文化に一定の距離を保ちながら、両者の長短を客観的に省察し、国際化が必要とする資質すなわち能力や価値観や態度を育成することをめざすものである。

そのためには、国際性についての実証的データを集め、検討を行い、その育成のあり方や、やり方についての展望を得たいと考え、ニュー・ヨーク日本人学校の児童・生徒の国際性についての調査研究¹⁾につづいて、アジアに眼を転じ、マレーシアというアジアを代表する国の首都クアラルンプールに設置されている日本人学校について調査研究を行うこととした。

第 I 章 クアラルンプール日本人学校の教育状況

I-1 クアラルンプール日本人学校の設立と環境

I-1-1 クアラルンプール日本人学校の設立

マレーシアには、クアラルンプール、ペナン、コタキナバルの3か所に、日本人学校が設置されている。その中で一番大きなものは、在マレーシア日本国大使館附属クアラルンプール日本人学校（略称“クアラルンプール日本人学校”，なお文中ではクアラルンプールは“KL”と略されている場合もある）である。この学校は、1966（昭和41）年11月に、クアラルンプール市内キアベンで、派遣教員2名、児童14名で発足した。

その後、日系企業の進出の増加に伴い拡張を続け、1976（昭和51）年9月には、クアラルンプール市内タマンセプテに移転し、そこも満員で狭隘となったので、1993（平成5）年4月には、セランゴール州サウジャナ（スバン国際空港近く）に移転した。校舎の敷地面積71,113㎡、建物面積25,032㎡で、最も完備したとみられるニュー・ヨーク日本人学校よりも広い。教職員65名、児童生徒数1,005名、50mプール、25mプールと冷房完備の講堂兼体育館、400mトラックがとれる運動場も整備され、日本人学校としては世界有数といってよい。総工費は約20億円で、自己資金、日本政府援助、企業寄付でまかなわれた。

この学校は、スバン国際空港から約5分、クアラルンプール市内に向かう道路沿いにあるので、空港から出て初めて見る大きな建物が日本人学校であり、マレーシアにおける日本の存在の大きさと、その責任の大きさを示しているともいってよい。²⁾

この学校の公式の開校式（1993年11月18日）には、マハティール首相夫妻も出席し、校内視察と授業参観も行った。日本とマレーシアの友好関係が明確に表された佳き1日であったといわれている。

クアラルンプール日本人学校は、キアベン時代（1966年9月～1976年8月）の10年間、タマンセプテ時代（1976年9月～1993年3月）の17年間、スバン時代（1993年4月～現在）の三か所に移ってきたが、生徒数の増加と、施設の拡充が注目される。³⁾1970年には幼稚部が開設されたのも、他の日本人学校とちがった特色である。

I-1-2 児童・生徒数の増加

クアラルンプール日本人学校の沿革略史が示すように、この学校の設立には、在マレーシア日本国大使館附属小学校設立準備委員会の熱心な努力によることがわかる。この学校は私立学校であるが、学校代表は、大使館の幹部になっている。

校舎は、前にも述べたように、キアベン時代、タマンセプテ時代、スバン時代と拡充してきたが、その理由は何といても、児童・生徒の数の増加による。

生徒数の推移を次にみてみよう。『学校要覧』によって、生徒数の推移をみると、若干の減少の年もあるが、大体増加の一途をたどっている。前年に比べ、昭和57（1982）年や平成3（1991）年のように100名以上増加した年、昭和59（1984）年や平成2（1990）年のように140名以上も増加した年もある。概して増加してきている。平成9年度がピークに達しているが、わが国の経済状況次第では減少するおそれもある。

I-1-3 学校・施設の状況

クアラルンプール日本人学校は、前にもふれたように、施設・設備が充実しており、他の日本人学校の模範となるのみならず、日本の小・中・高の学校でも、また近年の中・高一貫の中等学校でも、これだけの校地、建物をもったものは、その数は少ないのではないかと思われる。

学級編成をみると、幼稚部5クラス(計101名)、小学部1～5年各5クラス、6年4クラス(計930名)、中学部1年4クラス、2年3クラス、3年2クラス(計293名)で、合計43クラス、1,324名。各クラスとも、1クラス20～35名で、日本の学級と比べ、少人数編成となっている。⁴⁾

クラスルーム43の他に、特別教室が、理科、家庭科、美術、技術、音楽の各科にわたり整備され、コンピュータ室、LL教室、図書室も設けられている。

訪問した私が驚いたのは、50mプールと25mプールがあり、広い運動場が2つあったことで、ふつうの日本の学校では、みられない充実した施設のように思われた。

I-2 学校経営と教育課程

I-2-1 学校経営

学校経営については、種々の工夫がなされているが、『学校要覧』によって、その概要をみてみよう。⁵⁾

学校経営

1. 学校経営の基底

開校以来32年の歴史と伝統の上に、本校の教育を一層充実・発展させ、本校学校規則第3条及び第4条に定められた目的及び目標の達成を図る。

2. 学校経営基本方針

- (1) 教育は人であり影響であり感化であると言われている。本校職員はその自覚と教育者としての喜びと誇りを持ち、在外教育施設において常に研鑽し、専門職としての教養と識見を高め、全力を傾注してクアラルンプール日本人学校の教育に専念する。
- (2) 人間尊重の根底に流れる精神は愛である。その人間尊重の精神に立ち、限りなき敬愛の念に燃え、一人一人の園児・児童・生徒を大事にし「生きる力」を育むことに努める。
- (3) 開校32年の歴史と伝統を尊重し、教育内容及び教育方法の改善を図り、本校の教育を一層充実・発展させ、生命の躍動する校風の樹立に努める。
- (4) 海外校の特性を生かした調和的な教育課程を編成し、充実した実践を通して園児・児童・生徒の国際感覚を育成する。
- (5) 邦人社会及び現地社会・諸関係機関・PTA等との連携を積極的に進め、信頼と協力関係を深める中で、温もりに満ちた教育活動の展開に努める。

3. 教育目標

☆ 基本目標

園児・児童・生徒のもつそれぞれの個性と能力を十分に、しかも調和的に伸長させることを基調に、たくましい身体と、強い心と、すぐれた知性並びに豊かな国際性を持つ日本人を

育成する。

☆ 具体目標

(1) 目指す子ども像

- よく考え進んで学習する子ども
- みんなと仲良くする子ども
- ねばり強く体力づくりをする子ども
- 世界に広く目を向ける子ども

(2) 目指す学校像

- 園児・児童・生徒にとって、活気ある希望に満ちた学校。
- 全職員の協調と連帯感を基に、子どもたちのために働きがいのある学校。
- 外国に生活する父母の信託に応え、信頼される愛情と厳しさのある学校。

(3) 目指す教師像

- 人間尊重に徹し、敬愛の念に燃え、情熱と責任を持って職務に専念する教師。
- 教師としての指導力・識見・品位を高め、サービスの確立に努める教師。
- クアラルンプール日本人学校の職員として使命感・職責感・連帯感の強い教師。

4. 本校の教育課題（教育努力目標）

(1) 《道徳心の向上》

公正な判断に基づいて、行動できる高い知性を養い、合わせて強い意志と豊かな情操を培う。

(2) 《学力の向上》

進展する社会に適応し、自ら学び続けていくために必要な確かな学力を身につけさせる。

(3) 《健康・体力の向上》

地域や学校の環境に即応して、調和のとれた体力や技能の伸長を図るとともに、自ら健康・安全に留意して心身の育成に取り組める子どもを育てる。

(4) 《国際性の向上》

海外で生活している特性を生かして、自国や諸外国を理解させ、正しく愛国心を養うとともに国際感覚豊かな子どもを育てる。

5. 課題解決のための努力事項

(1) 基礎基本を重視した学力の向上

- ・新しい学力観に立った授業を創造し、子どもの「自ら学ぶ意欲・思考力・判断力・表現力」を育成する。(学ぶ側の教育=子どもの視点に立った自己学習力の育成)
- ・教材研究を充実し、指導内容の精選と重点化に努め、児童生徒一人一人の主体的な学習活動を支援する。

(2) 心の啓発を図る道徳教育の充実

- ・道徳教育全体計画に基づき、年間指導計画を見直し作成する。
- ・児童生徒に人間としての自覚を深めることを重視した「道徳時間」の指導方法の工夫改善に努める。

(3) 保健体育指導及び安全指導の充実

- ・生涯スポーツと体力向上を目指し、個に応じた学習の展開により、運動の楽しさ喜びを味わわせる。
 - ・自他の生命の尊重と安全指導の充実及び安全管理を徹底する。
- (4) 心の通い合う生徒指導の推進
- ・基本的な生活習慣、礼儀、あいさつ、スクールバスのきまり等の指導を徹底する。
 - ・一人一人の個性を尊重した学級経営及び教科経営を進め、園児・児童・生徒の自己指導能力を高める。
- (5) 進路指導の充実
- ・「生き方」の指導を重視するとともに、児童生徒が将来にわたって自己実現が図れるようにする。
 - ・進路指導組織の機能化、進路相談室の整備、進路指導資料の準備等を積極的に進め、児童生徒の「進路設計」への助言・援助に努める。
- (6) 国際理解教育の充実・深化
- ・「国際理解・文化交流推進校」の実施計画を見直し、国際交流、現地理解教育等の内容の充実・深化に努める。
 - ・日本とマレーシアの異なる点や共通点を見いだす事ができる活動や体験を具体的に位置づけて実践し、的確な評価を行い国際理解教育の改善に努める。
- (7) 情報教育（コンピュータ教育）の充実
- ・情報教育部の組織を拡大し、ティーム・ティーチング等を導入して情報教育の充実を図る。
 - ・校内施設を整備し、小・中学部連携の下にコンピュータ教育の推進が図れるようにする。
- (8) 特殊教育の充実
- ・深い人間愛に基づき、特殊教育に対する職員の共通理解と全校協力体制を確立する。
 - ・心身障害児に対する理解と交流活動を活発に推進する。
- (9) 英会話教育の充実
- ・新しいカリキュラム・教科書の浸透を図り、児童生徒の英会話能力を高める。
 - ・各学級担任と英会話教師との連携を密にし、英会話時間の充実を図る。
- (10) 職員研修の充実
- ・海外で生活する子ども・保護者の期待に応えるために、初任者研修・現職研修及び日常の授業実践を通して、教師としての専門性を高める。
 - ・全校研究課題解決に向けて、教師自ら積極的に実践し、園児・児童・生徒の変容を図る。
 - ・現地校参観、現地施設等見学、講演会等を実施し、国際理解教育推進上の資質を高める。
6. 本年度の重点努力事項
- 国際理解教育の充実・深化
 - 情報教育の充実
 - 英会話教育の充実

この『学校経営』の考え方は、重要な観点を示している。特に「学校経営基本方針」の中では、愛の精神を強調し、「生きる力」を育むことに努め、充実した実践をとおして、園児・児童・生徒の国際感覚を育成することを重視している点に注目したい。

また「4. 本校の教育課題」で、道徳心の向上、学力の向上、健康・体力の向上とならんで、国際性の向上、をあげているのは、国際性の育成という今日的な課題、しかも日本の学校では余り重視しない傾向がある課題を強調している点は、評価されるべきであると考えられる。

本年度の重点努力事項として、国際理解教育の充実・深化、情報教育の充実、英会話教育の充実、をあげていることは、まことに時宜に適したものであるとすることができる。

I-2-2 教育課程

〔1〕教科別、学年別授業時数

同校の『学校要覧』によると次のようになっている。⁶⁾

教科別週時数

		国 語	社 会	算 数	理 科	生 活	音 楽	図 美	技 家	体 育	英 語	道 徳	学 活	ク ラ ブ	英 会 話	合 計
小 学 部	1年	8		4		3	2	2		3		1	1		1	25
	2年	8		5		3	2	2		3		1	1		1	26
	3年	7	3	5	3		2	2		3		1	1		1	28
	4年	7	3	5	3		2	2		3		1	1	1	2	30
	5年	6	3	5	3		2	2	2	3		1	1	1	2	31
	6年	6	3	5	3		2	2	2	3		1	1	1	2	31
中 学 部	1年	5	4	3	3		2	2	2	3	3	1	1	1	2	32
	2年	4	4	4	3		2	2	2	3	3	1	1	1	2	32
	3年	5	4	4	4		1	1	2	3	3	1	1	1	2	32

学年別週授業時数

	学 年	月	火	水	木	金	計
小 学 部	1 年	5	5	5	5	5	25
	2 年	6	5	5	5	5	26
	3 年	6	6	5	5	6	28
	4 年	6	6	5	7	6	30
	5 年	6	6	6	7	6	31
	6 年	6	6	6	7	6	31
中 学 部	1 年	6	7	6	6	7	32
	2 年	6	7	6	6	7	32
	3 年	6	7	6	6	7	32

教科課程は、日本の文部省の学習指導要領に準拠しているが、小学校に「英会話」が設けられ、クラブ活動も4年から行われている。英会話は外国人が担当している。

- ニュー・ヨーク日本人学校では、全学年に週1時間の「米国社会」の教科があり、アメリカ人教師が担当しているが、マレーシアではこのような教科はない。
- ニュー・ヨーク日本人学校では、英語（英会話を含む）が小1より小3まで週4時間、小4より小6まで週5時間あることがマレーシアと異なっている。
- 以上のことより、ニュー・ヨーク日本人学校の週時数は、各学年共にマレーシア日本人学校の週時数より多くなっている。

〔2〕 授業日数と日課表

授業日数と日課表は、『学校要覧』によると次のようになっている。⁷⁾

(1) 年間授業日数と休業日数

学 期	月	授 業 日						休 業 日					合 計	祝 日
		月	火	水	木	金	計	土	日	祝	長期 休業	計		
1	4	2	1	3	2	2	10	3	2	1	14	20	30	アワルムハラム レーバーデー、こどもの日、ウェサックデー アゴンバースデー ムハマドバースデー ナショナルデー
	5	3	3	4	4	4	18	5	5	3	0	13	31	
	6	5	5	4	4	4	22	4	4	1	0	8	30	
	7	3	4	5	4	5	21	3	3	1	3	10	31	
	8	0	0	0	0	0	0	0	0	(1)	31	31	31	
	計	13	13	16	14	15	71	14	14	6	48	82	153	
2	9	4	5	5	4	4	22	4	4	0	0	8	30	ディパバリ 開校記念日 クリスマスデー
	10	3	4	4	5	5	21	5	4	1	0	10	31	
	11	5	4	4	4	4	21	3	5	1	0	9	30	
	12	3	4	4	4	3	18	3	3	(1)	6	13	31	
	計	15	17	17	17	16	82	15	16	3	6	40	122	

3	1	2	3	4	4	4	17	4	4	2	2	14	31	元日、ヌズルコーラン、ハリラヤブ アサ 2
	2	3	3	3	4	4	17	4	5	2	0	11	28	タイプサム?チャイニーズ ニューイヤー 2
	3	3	3	3	3	2	14	1	2	1	13	17	31	スルタンバースデー
	計	18	9	10	11	10	48	9	11	7	15	42	90	
	合計	36	39	43	42	41	201	38	41	16	69	164	365	

(2) 日課表

	小 学 部	中 学 部
校 時	月曜日 ~ 金曜日	
職員朝会	8:30 ~ 8:40	
朝の会・集会	8:40 ~ 8:50	
1	8:55 ~ 9:40	8:55 ~ 9:40
2	9:45 ~ 10:30	9:50 ~ 10:35
3	10:45 ~ 11:30	10:45 ~ 11:30
4	11:35 ~ 12:20	11:40 ~ 12:25
昼 食	12:20 ~ 12:40	12:25 ~ 12:40
休 憩	12:40 ~ 13:00	12:40 ~ 13:00
清 掃	13:05 ~ 13:20	13:05 ~ 13:20
5	13:25 ~ 14:10	13:25 ~ 14:10
(帰りの会)	14:10 ~ 14:20	
6	14:15 ~ 15:00	14:20 ~ 15:05
帰りの会	15:00 ~ 15:10	15:10 ~ 15:20
7	15:15 ~ 16:00	15:25 ~ 16:10
下校指導	16:20	
下 校	14:30	16:30

授業日数と休業日数を見ると、日本人学校の授業日数は、日本の学校の授業日数と比べ実質的に大差はないが、祝日の決め方は、現地に即したものとして特色があるといえることができる。

日課表を見ると、通学にはスクールバスを使うためまえからすると、アメリカのニュー・ヨーク日本人学校と大差はないが、始業が若干早く、下校は若干遅くなっている。しかし、クラスの1時間の長さは、45分と40分とのちがいがあり、クアラルンプールの方が長い。

〔3〕国際理解教育

平成6年度から文部省「国際理解・文化交流推進校」の指定を受け、国際交流ディレクターの派遣を受け、国際理解教育の研究実践にとりくんでいるところに、この学校の大きな特色がある。年2回（1回は現地校訪問、1回は現地校招待）、国際交流会が行われている。平成10

年度の「国際理解教育全体計画」を、『学校要覧』では次のように述べている。⁸⁾

国際理解教育は、朝の歌はマレーソングを歌い、小学校以上では、社会科、理科、音楽等の授業の中でも、マレーシアに関する理解が深まるよう配慮している。さらに幼稚部は満5歳から入学するが、それ以前の保育園で英語やマレー語を覚え、マレーシアの歌や英語の歌にも親しんでいる者が多く、幼稚部に入ってから、リーダー役を演じている。幼稚部での学習や遊びが、国際理解にも役立っている。又、夏休み中に行われる小・中学部の希望者に2泊3日のマレーシアの伝統的農村家庭のホームステイの経験を与えているが、その感想文集をみても、重要な成果をおさめていることが分かる。平成10年度の参加者は中学生42名、小学生55名である。⁹⁾

第二章 クアラルンプール日本人学校の児童・生徒の国際性に関する調査

II-1 クアラルンプール日本人学校の児童・生徒の学校生活の状況

クアラルンプール日本人学校に、現に通っている児童・生徒に対して、国際性に関する質問紙調査とその親に対して関連する調査を、1999年6月に行なった。対象となったのは、小学部4年(34名)、5年(35名)、6年(29名)、中学部1年(30名)、2年(28名)、3年(16名)の合計172名である。小学部1～3年を調査対象としなかったのは、国際性に関するこの種の質問紙調査に答えるのは無理だと考えたためである。この学校は、小学4年～5年各5クラス、小学6年4クラス、中学1年4クラス、中学2年3クラス、中学3年2クラスとなっているが、各学年から1クラスずつを調査対象とした。前回のニュー・ヨーク日本人学校の場合とちがって、中3を調査対象とすることができた。

質問紙による調査項目の中には、直接、国際性に関連しないものも含まれているが、以下、調査結果を述べ、それぞれについて、コメントを行いたい。

質問 a あなたの好きな科目を一つえらび○でかこみなさい。

全体的にみて、体育、図工が好まれている。特に体育は172名中66名、38.4%と群を抜いており、図工18.1%に続いては、理科11.6%で、音楽11.0%となっている。ただし音楽は中学部の1、2年で好まれる割合が、小学部に比べ格段に低い。

質問 b あなたのきれいな科目があれば1つだけ○でかこみなさい。

全体的にみて、数学、英語、音楽をきれいな科目としてあげている者が多い。数学は、172名中44名25.6%、英語は28名16.3%、音楽16.3%となっている。小学校には英語の教科はなく、英会話のクラスがあるが、英語をきれいと答えた者は小学部では、4年で、17.6%、5年40.0%、6年17.2%と、中学部に比べて高率である。

科目が好きかきらいかは、教師の教育方法、教材の難易度、子どもの学力や能力に左右される面があるので、今後の改善が期待される。

質問 c あなたは英語が得意ですか。(○でかこむ)

全体的にみると、「得意」「まあまあ得意」を合わせると、59%を越えているが、「得意でない」とする者も40%位にのぼっており、中3では50.0%に達している。

質問 d あなたは英語をもっと勉強したいですか。

この問は、英語の上達意欲をたずねたものである。全体的にみると、「したい」と答えた者が85名、49.4%で、「どちらともいえない」が71名で41.3%、「したくない」が16名で9.3%となっている。「したい」と答えた者は、経年的に漸増しているが、中3が中1、中2に比べ、減じているのが注意をひく現象である。

中学についてみると、英語は「得意でない」とした者の割合に比べ、「もっと勉強したい」とした者の割合は増えており、英語を学習する上達意欲は高くなっていると言える。

質問 e あなたは現地の言葉を知りたいと思いますか。

全体的にみると、「知りたいと思う」が、77名44.8%、「知りたいと思わない」が92名53.5%で、「知りたいと思わない」が多い。「知りたいと思う」は、学年別にみるとばらつきがみられ、小4、小5、中3で57%を越えているが、小6、中1、中2では34.5%～21.4%と低い。

次に「知りたいと思う」と答えた者に「何語を知りたいと思うか」をたずねたところ、45名58.4%の者が「マレー語」をあげ、次いで「英語」をあげた者が17名22.1%で、「中国語」をあげた者は6名で7.8%と低い。「マレー語」をあげた者は、小6の13.8%から、中3の50%と、各学年ばらつきがみられる。

質問 f 日本人で仲の良い友だちがいますか。

「友だちがいない」と答えた者1名、「回答不明」20名を除き、「友だちがいる」と答えた者151名中、友だちの数を1～5名とした者27名で15.7%、6～20名とした者94名で54.7%、21名以上とした者30名で17.4%と、友だちの数は多いとみてよい。

質問 g 日本人以外のマレーシアに住んでいる人で、仲の良い友だちがいますか。

「いる」と答えた者が53名30.8%で、「いない」と答えた者が116名67.4%、不明3人で、「いない」と答えた者が多い。前回のニューヨークの場合「いる」と答えた者が50.5%あったのに比べると、20%位のひらきがみられる。「いる」と答えた者の内訳をみると、「1人」と答えた者が11名、「2人」が12名、「3人」が9名、「4人」が5名、「5人」が4名、「6人以上」が12名となっている。

外国人の友だちと何語で話すかを聞いたところ、英語と日本語で会話する者が多いが、マレー語で会話する者も数は少ないが中1、2人、小6、1人存在している。

質問 h 学校でよく先生と話をしますか。

この質問は、学校の先生方とのコミュニケーションの状況を調べたものである。

「する」と「時々する」とを合わせると95.3%になっている。「しない」と答えた者は4.1%と少ないが、小4で1名、小5で4名、中2で2名と、先生と「話をしない」者がいることは問題点である。この質問への回答は、ニューヨークの場合と同じ傾向がみられる。

質問 i あなたはマレーシアのテレビ番組を見ますか。

マレーシアの文化・社会を知る上で、現地のテレビ番組は、有力な媒体となる。「よく見る」が8.1%、「まあまあ見る」が30.8%で、学年が上るにつれて低くなっている。「見ない」が59.9%で、「見ない」者の方が高率を示している。この傾向はニューヨークの場合と逆になっている。

質問 j あなたはマレーシアの映画館、美術館、博物館などに行きますか。

この質問は、マレーシアの娯楽施設や文化施設への接触度を調べようとした。

「よく行く」が 5.8%、「ときどき行く」が46.5%、両者を合わせると52.3%となり、「行かない」が46.0%である。ニューヨークの場合、「行かない」が 8.6%であったのに比べ、「行かない」者の割合が高いことを示している。

質問 k 塾に行ったり、“ならいごと” (たとえばピアノ、バイオリン) をしていますか。

「している」が 172名中 158名で91.8%、「していない」が14名で 8.1%となっており、「している」者が多い。「何をなっていますか」という問いに対して、一番多いのは「英語」で、172名中105名で61%、以下「塾」78名45.3%、「音楽 (ピアノ等)」54名31.4%、「テニス」49名28.5%、「水泳」26名15.1%の順となっている。

質問 l 学校ではあなたにとって特に楽しい学校行事がありますか。

「ある」と答えた者が、172名中132名で76.7%、「ない」と答えた者が39名で22.7%となっている。「ある」と答えた者に楽しい学校行事が何かをたずねたところ、小学部と中学部で共通しているのは、ペスタスバン (学芸会)、修学旅行、運動会、校外学習、球技大会等である。この他、小学部で国際交流会、中学部で合唱コンクール、盆おどり等があげられている。

他の章でもふれたように、この学校は学校行事にも特に工夫し、努力していると思われるが、楽しい学校行事がないと答えた者が39人22.7%になっていることは、注意を要すると思われる。

質問 m マレーシアの生活は日本にいたときの生活より楽しいですか。

「たいへん楽しい」が172名中59名34.3%、「どちらとも言えない」が103名59.9%、「楽しくない」が8名4.7%となっており、「どちらとも言えない」が最も多い。

「たいへん楽しい」と答えた者の理由をたずねたところ、小4から中3を通じて「新しい経験が得られる」「友人が多い」「食べ物がおいしい」「日本ではできない行事がある」が多い。逆に「楽しくない」と答えた者の理由として、「四季の変化がない」「言葉が通じない」「部活がない」等をあげている。

質問 n 学校で楽しいこととか、すばらしいと思うこと、の番号を○でかこんで下さい (いくつでもよい)。

「友だち」が最も多く、172名中 146名で、以下、「いじめがない」130名、「学校行事」75名、「体育・運動」70名、「先生がよい」65名、「環境がよい」61名、「授業が楽しい」44名の順となっている。複数回答であり、また項目の間に一線を画して区別できないものもあるが、「友だち」「いじめがない」が多いのは、人間関係がうまくいっていることを示しており、「先生がよい」「授業が楽しい」「環境がよい」が多いのも、学習環境が優れていることを示している。

質問 o マレーシアに生活していて良いと思うことの番号を○でかこんで下さい (いくつでもよい)。

「新しい経験が得られる」114名が最も多く、以下、「珍しい物がある」94名、「英語が学べる」90名、「自由である」78名、「土地が広い」44名、「マレー語が学べる」20名、「テレビがおもしろい」15名の順になっている。ただ、項目の一つとしてあげた「マナーがよい」が1人に止まっ

たことは留意すべきことである。

国際性の視点からみると、「新しい経験が得られる」ことは、海外で生活する者にとって重要なポイントであり、「英語が学べる」ことと共に、「マレー語が学べる」をあげていることも、マレーシアでの生活ならではの要素である。

II-2 クアラルンプール日本人学校の児童・生徒の国際性の指標と評価

II-2-1 国際性の指標

クアラルンプール日本人学校の児童・生徒の生活状況についての質問の中で、児童・生徒の国際性を知る上で、最も重要な指標となるものは、質問m「マレーシアの生活は日本にいたときの生活より楽しいですか」、つまりマレーシア生活の満足度についての児童・生徒の反応である。

質問mに対して、「たいへん楽しい」と答えた者と、「楽しくない」と答えた者に分けて、それぞれ他の要素との相関をみてみよう。この場合、要素として取り上げたのは、相関をみる上で、比較的重要と思われる次の7つの項目である。

- (1) 滞在年数
- (2) 質問c「あなたは英語が得意ですか」
 - ①得意 ②まあまあ得意 ③得意でない
- (3) 質問d「あなたは英語をもっと勉強したいですか」
 - ①したい ②どちらともいえない ③したくない
- (4) 質問e「あなたは現地の言葉を知りたいと思いますか」
 - ①思う（ 語） ②思わない
- (5) 質問g「日本人以外のマレーシアで住んでいる人で仲の良い友だちがいますか」
 - ①いる（ 人ぐらい） ②いない

・何語で話しますか（日本語、マレー語、英語その他）
- (6) 質問i「あなたはマレーシアのテレビ番組を見ますか」
 - ①よく見る ②まあまあ見る ③見ない
- (7) 質問j「あなたはマレーシアの映画館・美術館・博物館などに行きますか」
 - ①よく行く ②ときどき行く ③行かない

国際性の指標のたて方は、ニュー・ヨーク日本人学校の調査研究と大体同じで、比較しやすいようにした。ただ、質問eを「あなたが家で話している言葉は何ですか」に代えて、「あなたは現地の言葉を知りたいと思いますか」とした。その理由は、児童・生徒の現地語とくにマレー語への関心度をみた方がよいと考えたためである。

II-2-2 小学部児童の国際性についての考察

小学部4年～6年までの児童を全体的に見た場合、次のことが指摘できる。

- (1) マレーシア生活の満足度

マレーシアでの生活を日本にいた時の生活より「楽しい」と答えた者は、4年生で34名中13名(38.2%)、5年生で35名中11名(31.4%)、6年生で29名中7名(24.1%)、3ヶ年を平均すると(31.6%)であるが、学年が上がるにつれて、その割合は下がっている。他方、「楽しくない」と答えたものは、4年生では0、5年生で35名中1名(2.9%)、6年生で29名中2名(6.9%)で、3年平均では3%と数は少ない。総じて「楽しい」と答えた者が相当数いることは、子どもたちの国際性が高いことを評価できる。

(2) 英語の上達意欲

マレーシアでは、独立後マレー語による同化政策がとられているが、かつてイギリスの植民地であったことと、国際語としての英語が通用しているため、英語で話を通じる場合がかなりある。日本人学校では、小学部でも英会話の時間がある。「得意とする」者は98名中12名であり、「まあまあ得意とする」者は98名中47名にのぼっているが、「もっと勉強したい」者の数は若干下がっている。

(3) 現地語への関心

主としてマレー語への関心のみようとしたが、半数近くのものに関心を抱いている点は、マレーシアで生活する日本人学校の子どもとして高く評価されてよいと思われる。

(4) マレーシア生活の楽しさと友だちとの関係

小学部の児童の場合、98名中69名(70.4%)の人が外国人の友だちをもっていないと答えており、外国人の友だちが得にくいことを示している。「生活がたいへん楽しい」と答えた者、98名中31名の子どもで、外国人の友だちをもっていると答えた者は8名(25.8%)であり、ニューヨークの場合の(71.4%)と比べると低く、外国人の友だちをもっているかどうか、「生活がたいへん楽しい」ことの要素にはなっていないように思われる。

(5) マレーシア生活の楽しさとテレビ視聴

98名の児童のうち、テレビを「よく見る」「ときどき見る」を合わせると、42名(42.8%)いる。「生活がたいへん楽しい」と答えた者31名中16名(51.6%)がテレビ視聴を行っており、また「楽しくない」と答えた者がすべて「見ない」と答えている。テレビ視聴が、「生活の楽しさ」とかなり関わっていると見える。

(6) マレーシア生活の楽しさと文化施設

「生活が楽しい」と答えた者と「生活が楽しくない」と答えた者と文化施設への接触度には、差がないことを示している。この点はニューヨークの場合とちがっている。

(7) 生活の楽しさと親の態度

親の態度の影響をみると、「楽しい」と答えた者の両親の方が、「楽しくない」と答えた者の両親と比べ、①「マレーシアの文化・社会への満足度」では、5段階(4, 3, 2, 1, 0)で平均して2.23:2.00で前者が高く、②「マレーシア人の生活態度の感想評価」では、1.68:1.67で差はない。③「外国人との交際の多さとその楽しさ」という点では前者が高い。

①と③の点で、親の態度は子どもたちの態度と関連しているように思われる。「楽しくない」と答えた子どもの場合と、両親のやや消極的な態度との相関があるように思われた。

(8) 生活の楽しさと滞マレーシア年数との相関

マレーシアの生活が「楽しい」と答えた者と、「楽しくない」と答えた者との比をみると、次のようになっている。

滞在年数	小4 (34名中)	小5 (35名中)	小6 (29名中)
0-2年	4:0	5:0	3:0
2-4年	5:0	3:1	2:0
4-6年	3:0	2:0	1:0
6年以上	1:0	1:0	1:2
計	13:0	11:1	7:2

ニュー・ヨーク日本人学校の場合とちがって、滞在年数の長さで「楽しい」と答えた者の相関は明確ではない。また「楽しくない」とする者が極めて少ないことは、それ自体、学校や家庭が地域社会での生活に満足している者が多いことを示しており、国際性の観点からみて評価してよいことである。

II-2-3 中学部生徒の国際性についての考察

中学部1～3年までの生徒を全体的に見た場合、次のことが指摘できる。

(1) マレーシア生活の満足度

マレーシアでの生活を日本にいた時の生活より「楽しい」と答えた者は、1年生で30名中16名(53.5%)、2年生で28名中9名(32.1%)、3年生で16名中3名(18.8%)、3学年平均すると(34.7%)である。学年が上がるにつれて、「楽しい」と答えた者の割合は下がっている。小学4年から中学3年にわたって、経年的に下がっているわけではなく、小学6年で24.1%、中学1年では53.3%というように、いったん上昇して、また下がっていくという現象が示されている。

「楽しくない」とする者の数は極めて少ない。小4、中1の場合のように0の学年もあり、小5で1名、小6で2名、中2で2名、中3で2名と、数は限られており、全体的に、生活の満足度は高く、国際性も高いといえることができる。

(2) 英語の上達意欲

中学部には教科として英語がある。「得意」とする者は74名の中で中1の3名のみで、「まあまあ得意」とする者41名で、「得意でない」者30名であり、学年が進むにつれて「得意でない」とする者の割合は、30%、46%、50%というように上昇している。「勉強をしたい」とする者は41名、「どちらともいえない」29名、「したくない」者4名となっている。「勉強をしたい」と明確に上達意欲を示した者の割合は74名中41名(55.4%)で、さらに向上させる必要があるように思われる。

(3) 現地語への関心

主としてマレー語への関心をもつ者は、74名中27名(36.4%)で、小学部の98名中50名(51%)に比べ低いが、マレー語や中国語への関心をもつ者が相当数いることは、評価さ

れるべきことがらである。

(4) マレーシア生活の楽しさと友だちとの関係

中学部の生徒の場合、74名中47名(63.5%)が外国人の友だちをもっていないと答えており、外国人の友だちが得にくいことを示している。「生活がたいへん楽しい」と答えた者は74名中28名(37.8%)で、外国人の友だちをもっている者は、中1で15名中7名、中2で9名中2名、中3で3名中1名であり、合計27名中10名(37%)で、小学部の場合の25.8%よりは高いが、ニューヨークの場合の(71.4%)と比べると低い。外国人の友だちをもっているかどうかは、ニューヨークの場合とちがって、「生活がたいへん楽しい」ことの要素にはなっていないようにみえる。

(5) マレーシア生活の楽しさとテレビ視聴

74名の生徒のうち、テレビを「よく見る」「ときどき見る」を合わせると、25名(37.8%)いる。「生活がたいへん楽しい」と答えた者27名中、中1で15名中6名、中2で9名中1名、中3で3名中1名、合計8名(29.6%)のみがテレビ視聴を行っており、小学部と比べ格段に低い。「楽しくない」と答えた者4人中3人はテレビを視てないのに比べると、「楽しい」と答えた者のテレビ視聴率は高いと言える。

(6) マレーシア生活の楽しさと文化施設

「生活が楽しい」と答えた者で文化施設へ接している者は中1で15名中5名、中2で9名中6名、中3で3名中2名、合計27名中13名(48.1%)である。これに対し、「生活が楽しくない」と答えた者4名中3名は文化施設へ行ったことがない。小学部の場合と比べると、中学部の場合、「生活の楽しさ」と文化施設との接触の相関は高いとみてよい。

(7) 生活の楽しさと親の態度

親の態度の影響をみると、「楽しい」と答えた者の両親の方が、「楽しくない」と答えた者の両親と比べ、①「マレーシアの文化・社会への満足度」では、5段階(4, 3, 2, 1, 0)で、平均して2.04:1.75で前者が高く、②「マレーシア人の生活態度の感想評価」では1.93:1.5で前者が高く、③「外国人との交際の多さとその楽しさ」という点では前者が高い

①②③の点で、親の態度は子どもたちの態度と関連しているように思われる。特に「楽しくない」と答えた子どもの場合に、両親のやや消極的な態度のもたらす影響がみられるように思われる。

(8) 生活の楽しさと滞マレーシア年数との相関

マレーシアの生活が「楽しい」と答えた者と、「楽しくない」と答えた者との比をみると、次のようになっている。

滞在年数	中1 (30名中)	中2 (28名中)	中3 (16名中)
0-2年	4:0	2:1	1:0
2-4年	8:0	3:1	1:2
4-6年	0:0	2:0	0:0

6年以上	3 : 0	2 : 0	1 : 0
計	15 : 0	9 : 2	3 : 2

中学部に関しては、「楽しくない」とする者が滞在年数が4年以下に多く、4年以下と4年以上とでは差があることが言えるが、小学部の場合と合わせると、一概に滞マレーシア年数の長さが「楽しい」と感ずるきめてとは言えないと思われる。

終 章

この論文では、クアラルンプール日本人学校で学ぶ子どもたちの実態調査を質問紙によって行い、他の資料をも参考にして検討してきた。

この場合、国際性が高いか低いかの指標の中心として、外国生活への適応度があることが、国際性が要求する重要な指標と考えた。国際化のために必要な能力は、英語やマレー語の能力、異質な文化を理解しようとする価値観や態度を含んでいる。そこで、滞マレーシア年数、英語の能力、英語の上達意欲、マレー語への関心、外国人の友人関係、マスメディアの代表的媒体としてのテレビの視聴、現地の文化施設等への接触度などとの相関をみるが必要であると考えた。

またニュー・ヨーク日本人学校の調査研究の場合と同じように、親の現地文化への関心等との関連を考察した。小学部の児童、中学部の生徒について前述の総合的考察と重なる面もあるが、簡潔にまとめると次のように言える。

(1) 滞マレーシア年数

滞マレーシア年数が長いか短いかは、「マレーシア生活を楽しい」とするきめてにはなっていない。この点ニュー・ヨーク日本人学校の場合のように、滞在年数が長いものほど「楽しい」という者の割合が高いのとはちがっている。

(2) 言語への関心

マレーシアでは、マレー語が国語とされているが、英語がかなり通用する国である。調査結果では英語の能力は高いと思っている者は多いとは言えないが、上達意欲はかなり高いと言える。マレー語への関心が高い者が相当数いることは、マレーシアで生活する者として望ましいことである。

(3) 外国人の友人

外国人の友だちをもっている者は、ニューヨークの場合より7 : 3で低い、ニューヨークの場合とちがいが、これが生活の楽しさの大きな要素にはなっていない。しかしマレーシア人の友人をもっている者が相当数いることは、海外生活を送る者としての貴重な経験であることはたしかである。

(4) テレビ視聴と文化施設の接触度

小学生の場合より、中学生の場合、「生活の楽しさ」と「文化施設の接触度」の相関は高い。小学生の場合も中学生の場合も「生活が楽しくない」とした者は、テレビ視聴率は

ともに低いことが言える。

(5) 親の態度と子どもの生活の満足度

小学部の児童と中学部の生徒ともに両親が、マレーシアの文化への関心や感想が低い場合やマレーシア人の生活態度への感想が低い場合、子どもが「生活が楽しくない」とする者との相関が高いように思われる。

(6) 海外生活と国際理解

日本人の多くが、内と外とを区別し、集団志向の傾向や経済至上主義の生活態度をもちがちなのに対し、海外生活を送った子どもたちは、日本の国際化のホープであることを、この調査研究でも感じた。特に、この学校の国際理解教育の教育計画は、日本の学校の模範となるものと言ってよい。またマレーシア人の家庭のホームステイの計画も評価されるし、子どもたちの感想文をみても感心するものが多かった。ぜひこの体験が生かされることを期待したい。

ただし実態調査研究からみると、家庭でのレベルで現地の人々との交流が十分に行われているかという点、必ずしも全面的に肯定できないものがある。その理由としては、私の狭い見聞からではあるが、日本人ばかり住んでいるコンドミニウムに住み、伊勢丹などで買物をしておれば、外国の人と接することは比較的少なくなる。むしろ学校生活はその穴をうめるものとして、重要な役割をもっている。

また、マレーシア文化やマレーシア人の生活態度への親の感想がやや辛いという印象をもったが、文化の多元的見方をもっと育てていくことが大切であるように思われた。

注

- 1) 田浦加津子 1999 「ニュー・ヨーク日本人学校児童・生徒の国際性に関する調査研究」 愛知淑徳大学『異文化コミュニケーション研究』愛知淑徳大学
- 2) 田浦宏己・直美『マレーシアの風』1994 Pp.72-74 非売品
この冊子は筆者が1991年3月から1994年3月までの三年間、在マレーシア日本国大使館員として勤務した時の記録である。
- 3) クアラルンプール日本人学校 1998 『学校要覧』 Pp.13-15
- 4) 同上 P.33
- 5) 同上 P.31
- 6) 同上 P.41
- 7) 同上 P.32, P.41
- 8) 同上 P.44
『平成10年度 クアラルンプール日本人学校小学部研究紀要』 1999 P.5
在マレーシア日本国大使館附属クアラルンプール日本人学校
- 9) クアラルンプール日本人学校 1998
『第1回小学部マレイカンボン(故郷)ホームステイ感想文集
第6回中学部マレイカンボンホームステイ感想文集』

参考文献

- 江淵一公編 1998 トランスカルチュラルリズムの研究 明石書店
小林哲也 1998 国際化と教育－日本の教育の国際化を考える 放送大学教育振興会
佐藤郡衛 1999 新訂国際化と教育－日本の異文化間教育を考える 放送大学教育振興会
田浦宏己・田浦直美 1994 マレーシアの風 非売品